Institute of Human Culture Studies Otsuma Women's University

Newsletter

No. 7

2018

CONTENTS

巻頭言　「このとりとめのなさが、好きっ」 …… 1
協賛企業 …… 1
科研費申請と研究活動PDCA …… 2
科研費採択課題を紹介します …… 2
オンラインジャーナル『人間生活文化研究: International Journal of Human Culture Studies』 …… 6
お知らせ …… 8
人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー 2018 …… 8

〈大妻女子大学人間生活文化研究所〉

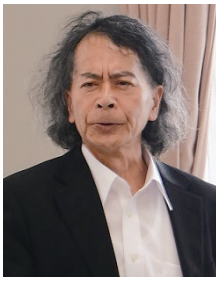
巻頭言　「このとりとめのなさが、好きっ」

ぼく若気のいたりというか勢いで専門と呼ばれるような研究領域を二十とかそこいら引っ張って、そうなると「専門」という観念自体とも余り縁がないが、学業（と人生自体）もそろそろ店じまいに近い今、顧て最大の関心事は「テーブル」という家具（ないし観念）だったのだなあと思う。机、もしくは卓。

いろいろな（できるだけ普段は遠い、というか違った）人が集まってそれを囲んで食べ、かつ喋り合う具としてのテーブルが面白い。十七世紀後半から十八世紀中盤に「カンヴァセーション・ピーシズ」という名の、テーブルを囲んで能う限り沢山の人間が寄り集まっているということ自体を画題にした絵がヨーロッパを席捲したし、同じ頃テーブルをはさんで貴顕紳士の会話を飽きもせず記録した「テーブルトーク」という一大文芸ファッションがあったが要するに「近代」という大掛かりすぎて仲々見えにくいこの三百年ほどの文化がテーブル化、テーブル狂いということで説明がつく、とぼくには思える。スマホを中国語で「手机」と言うが、それ巧い。

面白いのはテーブルに集まるのが人ばかりでなく、本の目次をテーブル・オヴ・コンテンツと呼ぶが如く、知識や情報でもあることで、卑近な例で言えばタイムテーブル、時刻表がそうだがテーブルの持つ図示、図表という分類・整理の意味が面白い。コンピュータでやるタビュレーションもそう。第一、きみの知識を支えるタブレットだって、皆そう。

この人間生活文化研究所の事業全体がそうだが、驚くばかり多彩なテーマの論文が延々並ぶそのジャーナルというか大型紀要が久しぶりに、集まること、並ぶことの楽しみを思いださせてくれる相手で、年一度の大きな愛読書であることを一テーブル狂として告白しておく。この多方面の包括力が、専門、専門といってちぢこまっていきがちな昨今の学門状況をわらうようで痛快。「卓」越している。



大妻女子大学
副学長
高山　宏

協賛企業

人間生活文化研究所は、多くの企業の皆様からご支援いただいています。

前田建設工業株式会社
清水建設株式会社
ダイダン株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社九電工
山崎製パン株式会社
株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社岡村製作所
富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
キユーピー株式会社
東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行
SMBC日興証券株式会社
株式会社中村屋

（順不同、2018年2月1日現在）

科研費申請と研究活動PDCA

人間生活文化研究所では、本学教職員の外部競争的研究資金の獲得を支援し、大学の研究力を向上させるために、

■科研費申請講座「科研塾」
■申請内容に関する個別相談
■専門家による申請書の添削

などを行っています。

また他にも、科研費等申請のもとなる研究を助成するために、

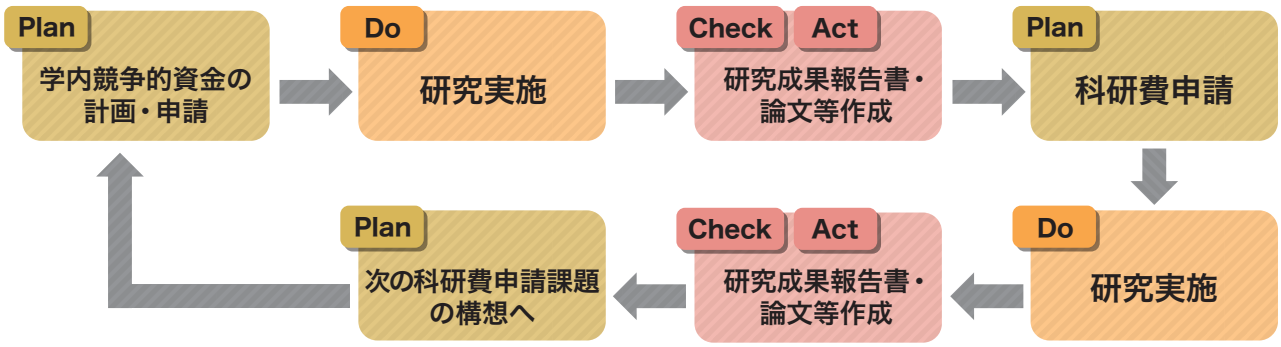
■戦略的個人研究費
（本学総務グループと協働）
■共同研究プロジェクト
■大学院生研究助成（A）（B）
■研究員研究助成

といった学内競争的資金の企画・運営や、右記学術雑誌、図書の企画・編集・発行により、研究成果の公開を支援しています。

■国際学術雑誌（オンライン）『人間生活文化研究』
■電子書籍「Otsuma eBook」

これらの事業を利用することにより、下記のような研究活動のPDCAサイクルを回すことも可能です。

ぜひご活用ください！！



研究活動PDCAサイクルの例

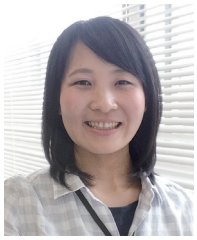
科研費採択課題を紹介します

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。（日本学術振興会ホームページより）　平成29年度、**本学では、新規採択課題13件を含む、全48件が採択されました！！**　本号では、そのうち7課題についてご紹介します。なお、その他の課題につきましては、前号、前々号をご覧ください。**http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/about/newsletter**

科研費 KAKENHI

研究課題

貧困世帯の若者の移行と家族に関する研究



研究代表者　林　明子
所属　家政学部
種目　研究活動スタート支援
研究期間　H28-H29

現在、日本の子どもの貧困率は13.9%であり、約7人に1人の子どもが経済的に困難な状況にあるとされています。子ども時代に貧困であることは、さまざまな経験や機会を失うだけでなく、将来の進学や就職にも影響を及ぼすことが明らかになっています。こうした問題に対して、国は子どもの貧困対策の推進に関する法律を制定し、子供の貧困対策に関する大綱を定め、子どもの貧困対策を打ち出しています。また貧困の世代的再生産を断ち切るべく、さまざまな生活支援や学習支援が全国で実施されているところです。

そうした中で、貧困世帯に育った若者が学校を離れ、仕事に就くまでのプロセスを追跡した研究はいまだ数少ないのが現状です。これまで生活保護世帯の若者を対象としたインタビュー調査から、彼／彼女らは家庭生活の変容に対応するかたちで、家庭に必要不可欠な役割を担っており、そのことが結果として、学校や学習の優先順位を下げていることを明らかにしてきました。しかも、そうした役割は、彼／彼女らの自己肯定感の源泉ともなっており、ますます家庭生活にひきつけられた生活を送っていました。しかし、彼／彼女らが仕事に就く段階になればそうした生活を続けることは難しく、次第に家族関係にも変化が生じる可能性が考えられます。

貧困の世代的再生産を考える上では、彼／彼女らが社会的自立を果たす様相を捉えることが必要であるため、本研究では、①生活保護世帯の若者がいかに学校から仕事へと移行するのか、②移行する前と後で、彼らと家族との関係性はどのように変化するのかを明らかにしたいと考えています。

研究課題

民族誌的アプローチにもとづく難民の定住プロセスの国際比較研究

研究代表者　久保　忠行
所属　比較文化学部
種目　若手研究（B）
研究期間　H27-H29

本研究の目的は、福祉国家、移民国家、非移民国家での難民の定住プロセスを人類学の視点から比較し明らかにすることです。私が研究対象とするのは、ミャンマー（ビルマ）を出身とするカレンニー（赤カレン）という人々です。

本研究では、タイの同じ難民キャンプからほぼ同時期に各国へ再定住した難民を追いかけて、定住プロセスを明らかにします。難民を対象とした調査では、政策と援助内容に焦点があてられがちですが、本研究では、生活世界の再構築、食材確保の実践、教会のネットワークや難民たちの自助的な活動、最近ではSNSを用いた繋がりなどインフォーマルな側面にも着目します。

本研究が射程とするフィンランド（福祉国家）、オーストラリア（移民国家）、日本（非移民国家）は、それぞれ異なる成立過程と特徴をもつので、横並びに比較できないと思われるかもしれません。しかし、エスニックな同質性や人口に占める外国人の割合、社会の急速な高齢化とそのなかで外国人労働者に期待される役割という点でフィンランドと日本には類似性がみられます。またオーストラリアの多文化主義と日本の多文化共生の意義や限界にも共通点がみられます。

カレンニーという誰も知らない人を研究して何になるのだ、と思われるかもしれません。しかし「周縁」からみたほうが「中心」で何が起こっているのかがより鮮明に見えてきます。これが私の研究の面白さの一つです。現在、世界中で難民が問題視されています。非常に難しい問題ですが、解決の糸口を探るには国家という「中心」からだけではなく、難民の視点からもテーマにアプローチする必要があると考えています。

研究課題

台湾ニューシネマとそれ以降の台湾映画における「日本時代」表象研究

研究代表者　赤松　美和子
所属　比較文化学部
種目　若手研究（B）
研究期間　H27-H30

昨今、台湾では日本植民地時代（1895-1945）を描いた映画が活況です。例えば、2008年には、日本の植民地統治と引き揚げを日台の悲恋の物語とした魏德聖監督『海角七号』が大ヒットし、歴代台湾映画の中で最高の興行収益を上げました。それ以来、植民地期最大の抗日暴動である霧社事件（1930）を活劇化した魏德聖監督『セデック・バレ』（2011）、現代の大学生が「日本時代」へタイムトラベルする葉天倫監督『大稲埕』（2014）、嘉野農林学校野球部が1931年に甲子園で準優勝した実話を青春ドラマ化した馬志翔監督『KANO』（2014）など、「日本時代」は台湾エンターテイメント映画の創作源となっており、いずれの作品も多くの観客を動員しました。

台湾映画において「日本時代」表象に先鞭をつけたのは、王童監督『稲草人』（1987）、侯孝賢監督『悲情城市』（1989）、王童監督『無言的山丘』（1992）、呉念真監督『父さん』（1994）など台湾ニューシネマの作品です。台湾ニューシネマにおける「日本時代」が、脚本家たちの直接的な記憶に基づき、中華民国ではなく台湾の歴史の一部を刻印するためのノスタルジア或いは傷跡として映し出されているのに対し、2008年度以降の作品では、「日本時代」はエンターテイメント映画の材料となっています。

本研究では、なぜ「日本時代」を創作源として選ぶようになったのか、台湾ニューシネマが撮られた1980年代から現在までの台湾映画における日本植民地記憶の再記憶化の変遷を辿り、「親日」「反日」とは単純には言い切れない台湾における日本像の重層性を明らかにしたいと考えています。

科研費 KAKENHI

＜新規＞研究課題

ハワイ語ラジオ番組を事例とする危機言語の復活とメディア利用に関する会話分析的研究

研究代表者　古川　敏明
所属　文学部
種目　若手研究（B）
研究期間　H29-H32

私が専門とする言語学では、消滅の危機に瀕する言語（危機言語）の記述・保存が重要な研究課題のひとつとなっている。本研究は語用論的観点からハワイ語の記述・保存に貢献することを目指している。ハワイ語は言語再活性化の成功例として知られているが、ハワイ語だけによる没入教育が行われている学校教育以外の場面、特にマスメディアにおけるハワイ語使用に関する研究が不足している。

本研究は平成25-28年度に実施したハワイ語ラジオ番組における相互行為に関する先行プロジェクトを発展させるものである。先行プロジェクトでは、1972年から1988年にかけて全417回放送されたラジオ番組Ka Leo Hawai'i（カ・レオ・ハワイ）の音声データを分析対象とした。「ハワイの声」という意味のこの番組は、ゲストとして招かれた主に年配の話者が番組ホストとさまざまな会話をするというもので、先住民の言語文化の記録・保存を目的としていた。

新たに採択されたプロジェクトでは、年配の話者をゲストに迎えることが困難になった状況下で放送されていた1990年から2000年までの番組第２期に着目する。第２期にはハワイ語を第２言語として用いる新たな人物たちが番組ホストを務めていた。インターネット上で公開されている番組録音のデータベースを利用し、当時の若い話者たちを中心とする第２言語としてのハワイ語使用について調査を進めていく。

＜新規＞研究課題

住居系市街地の住宅更新における賃貸併用住宅の有用性に関する研究

研究代表者　松本　暢子
所属　社会情報学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H29-H31

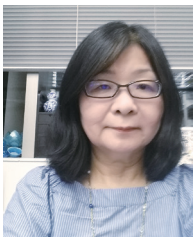
住居系市街地では、家族による住宅の継承が行われず、住宅更新の遅れや空き家・空き室化が問題となっております。こうした住宅更新の遅れは住宅の管理不全や周辺の住環境にも様々な影響をもたらしています。

本研究は、「資産運用型「賃貸併用住宅」の市街地更新およびコミュニティへの影響と効果の分析」（H25-28科研費　基盤研究（C））に続く研究です。資産運用を目的とした賃貸住宅を併設した住宅（賃貸併用住宅）の供給は、住宅メーカーによって1990年代より取り組まれてきました。これまでの研究では、賃貸併用住宅が建替えにおける経済性と家族の変容の受け皿と成ることを明らかとしました。今年度からは、賃貸住宅を併設していることの空間的かつ地域資源としての価値に注目しています。とりわけ、地域資源としての賃貸併用住宅ストックの価値について、分析・検討を行い、家族による住宅更新・住宅継承の促進および市街地環境面を考慮した賃貸住宅建築のあり方を示すことが目的です。

また、賃貸併用住宅は、一般的な賃貸住宅に比較すると、オーナーの住戸に併設されていることから管理の適正化やオーナーを介した地域社会との関係の形成が期待されます。家族の成長に応じた住生活ニーズに応える空間の融通性を有していることに加え賃貸住宅が余剰空間として、地域社会に貢献する「開かれた住まい」となる可能性を持っており、こうした住宅建築の制御と誘導が必要と考えています。

＜新規＞研究課題

ジェンダーからみる近代日中女性関係史の総合的研究――月曜クラブと一土会を中心に



研究代表者　石川　照子
所属　比較文化学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H29-H31

1920年代末から1930年代において、日本の女性知識人たちの議論と交流の場であった月曜クラブと、そこから発展して作られた、隣国中国を知ることを目指した一土会という２つの女性グループの活動を明らかにし、近代日中関係史をジェンダーの観点から分析することが研究の目的です。これまでも科研費によって月曜クラブと一土会の実質的幹事であった東京朝日新聞社初の女性記者竹中繁の未公開史料（中国旅行日記・原稿・写真等）について分析を行ってきました。その成果は、2018年春に研文出版から刊行される予定です。

今回はさらに近代における日本・中国の女性同士がいかにして関係性を構築しようとしていたかの基礎的研究として、「日中女性関係史」という枠組みを提起し、1920年代末から30年代において、その活動の中心となったグループ「月曜クラブ」と「一土会」に焦点を当てます。「月曜クラブ」には市川房枝、林芙美子、村岡花子、岡本かの子等が、「一土会」には市川房枝、高良とみ、久布白落実、平塚明子（らいてう）等錚々たるメンバーが名を連ねていました。当時の日本の女性知識人たちの関心は主として欧米に向けられていましたが、その中で中国の女性に目を向け、国家間関係の悪化とは裏腹に、彼女たちを知ろうという活動が行われていた点に着目することが、この研究の最大の独創性です。世界的にファシズム傾向が強まる中で世界情勢を学び、同じ女性同士というジェンダー関係の共通性を基盤として、理解と融和を目指して活動をしていたことを探ることは、近代東アジアにおけるジェンダーの歴史的構築の在り方を根源から問い直すことになるでしょう。

＜新規＞研究課題

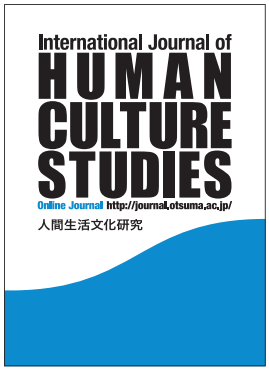
育児期の女性の精神的社会的要因や地域・家族の支援と子どもの食環境や発達との関連

研究代表者　小林　実夏
所属　家政学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H29-H33

社会の高齢化、家族の小規模化が進む中で、家庭で子育てに当たる親には子育ての負担を一人で抱え込むこと、社会活動を制限されることなどに対する不安が大きく、子どもを生み、育てる上での障壁も大きい。したがって、母親は出産後の育児期間中にも不安障害を発症する割合は高く、育児行動に影響を与える可能性もある。特に出産後に職場に復帰した女性にとって仕事と子育ての両立には心理的負担が伴う。母親の不安障害が子どもの情緒・神経発達に影響を及ぼすことは報告されているが、子どもの食環境、栄養摂取、発育に与える影響については報告が少ない。出産後に職場に復帰した女性の不安障害のケアにとって、ソーシャルサポート、家族のサポートは重要であるが、育児期の就業女性の不安障害、子どもの食事、ソーシャルサポート、家族のサポートの相互関連性について研究した例はみられない。

本研究は、国立成育医療センターで実施されている「成育母子コホート研究」において蓄積された情報に、新たに６歳時点での子どもの食環境や食品・栄養素摂取量、発達等の調査情報を追加することで、出産後１か月、６か月、１年の母親の産後うつ、不安障害、健康関連QOL、ボンディング障害、あるいは就労状況、家族構成等多様な要因と生後６か月、１年、２年、３年、６年を経過した時点の子どもの食環境、栄養摂取、発育との関連について横断的・縦断的に検討する。また、これらの関連に出産・育児に関するソーシャルサポート、家族のサポートが与える影響についても明らかにしていきたい。

オンラインジャーナル『人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies』



本誌では「人間の生活と文化」に関わる研究論文の投稿を随時募集し、これまでに**200編を超える論文を掲載**してきました。トピックは、被服学、食物学、児童学、ライフデザイン学、日本文学、英文学、コミュニケーション文化学、社会情報学、人間関係学、人間福祉学、比較文化学など広範囲に渡ります。

以下、一覧をご参照ください。

【ご案内】本誌「原著論文」「短報」のピア・レビューについて

査読付き論文(原著論文、短報)の投稿時に、投稿者は査読者3～5名を推薦できます。
但し、同一研究室の研究者や師弟関係にあたる研究者などの利害関係者を除きます。推薦された査読者は査読者選定の参考にします。
投稿についてはこちら↓をご覧ください。
http://journal.otsuma.ac.jp/

J-STAGE

投稿無料　随時募集　投稿資格制限なし　原著論文・短報は査読あり　字数制限なし

No.27(2017) 掲載論文一覧

▶ 原著論文　(査読有り)

論　題	著　者
衣服設計用着衣モデル生成のための基礎研究―身頃部分の検討―	土肥 麻佐子(文教大学)
運動様式の異なる一過性運動が中年女性の気分に及ぼす影響 ―ボクシングとヨガを取り入れた運動プログラムの場合―	早川 洋子(東京国際大学)ほか
インドの教育現場におけるろう文化	舘井 菖(上智大学)
大分県日田市地域の筑後川水系における泡状物質中のバイオマーカーの地球化学的特徴	井上 源喜(社会情報学部)ほか
A施設における介護記録の勉強会実施前後の意識の変化	古市 孝義(人間関係学部)
小学校理科授業における教師の指導内容について―小学校教師向けの調査結果を分析して―	石井 雅幸(家政学部)ほか
近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について―岡倉天心, 長尾雨山そして呉昌碩の貢献―	松村 茂樹(文学部)

▶ 短　報　(査読有り)

論　題	著　者
食餌性肥満モデルマウスにおける肝臓脂質蓄積および軽度炎症に及ぼすロイシンとバリンの効果	工藤 陽香(大学院)ほか
カヤン女性の首輪による身体変工の美醜に関する計量的研究	下田 敦子(人間生活文化研究所)ほか
Perception of neck ring wear using SD Method	Atsuko Shimoda (Institute of Human Culture Studies) et al.

▶ 報　告

論　題	著　者
長編アニメーション映画『崖の上のポニョ』の構造分析―2編の小さな異郷訪問譚の接合―	大喜多 紀明(京都民俗学会)
Fluorescence imaging-based analysis of the mitochondrial permeability transition pore opening in cardiomyocyte-derived H9c2 cells	Iyuki Namekata (Toho University) et al.
多様化する社会において大学の果たす役割を考える―個性を重視した高等教育の実現に向けて―	川合 宏之(流通科学大学)
青年期から中年期の成人における犬の飼育状況と健康関連QOLとの関係 ―犬の主たる飼育者とペットの非飼育者の比較―	早川 洋子(東京国際大学)ほか
The transfer of hairdressing skills and techniques ―The necessity of technical guidance for hairdressing instructors―	Seiji Kawano (Yamano College of Aesthetics) et al.
Management evaluation system for skill assessment―On the psychological interaction between the "Teaching side" and "Learning side" in the teaching methodology of hairdressing techniques―	Seiji Kawano (Yamano College of Aesthetics) et al.
福祉分野における家政学教育のあり方(第1報)―「手づくり」のすすめ―	桐原 美保(人間関係学部非常勤講師)ほか
美容実習教育担当者に期待される能力	河野 誠二(山野美容芸術短期大学)
技術系職場・学校における指導方法―その現状と問題点・解決方法―	河野 誠二(山野美容芸術短期大学)
福祉分野における家政学教育のあり方(第2報)―生涯学び続ける技能の継承―	桐原 美保(人間関係学部)ほか
描く楽しみが広がる「紙アプリ」を用いた教育実践―全国の学校の先生との共同の取り組み―	生田 茂(社会情報学部)ほか
崇徳院の『久安百首』について―四季部と恋部を中心に―	柏木 由夫(文学部)

論　題	著　者
「情報的な見方・考え方」の枠組みに沿ったモデルカリキュラムと教材の提案	本郷 健（社会情報学部）ほか
学校の先生と取り組む合理的配慮指針に基づく手作り教材の制作と教育実践	生田 茂（社会情報学部）ほか
日本からの手紙 ―ハワイ先住民が綴った19世紀末の日本―	古川 敏明（文学部）
栄養士養成課程における献立作成能力に関する研究 第３報―学生が作成した献立の実態と課題―	蓮見 美代子（短期大学部）ほか
小鹿野歌舞伎における三番叟について（1）―その歴史的背景をさぐる―	安倍 希美（北里大学）
合理的配慮指針に基づく教材と授業手法の開発―海外の研究者との共同の取り組み―	生田 茂（社会情報学部）
短編アニメーション作品『On Your Mark』の裏返し構造―宮崎作品にみられる特徴―	大喜多 紀明（京都民俗学会）
「キャリア心理学セミナー」の授業概要と意義―心理学教育を通した社会人基礎力の育成―	西河 正行（人間関係学部）ほか
地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究 ―平成28年度の「灰干しがつなぐ地域再生ネットワーク」の展開―	干川 剛史（人間関係学部）
ロシアにおける文化的多様化と教育改革―補充教育および教師教育を中心に―	森岡 修一（文学部）
福島県浜通り地域における複合災害の記憶と表象―文学研究の立場から―	五味渕 典嗣（文学部）
自閉症スペクトラム児の母親に対する養育支援―RDIによるコンサルテーションの事例検討―	高橋 ゆう子（家政学部）
スタール夫人と世論	武田 千夏（比較文化学部）
検証と血債―シンガポールにおける記憶の視覚化―	城殿 智行（比較文化学部）
定量的PCR法による腸内細菌叢の解析法の確立とマウスを用いたMACs（Microbiota-accessible carbohydrates）の評価	青江 誠一郎（人間生活文化研究所, 家政学部）
介護支援専門員の相談面接力向上をどのように考えるか―スーパーバイザー養成研修の試みから―	丹野 眞紀子（人間関係学部）
子ども支援における権利論的アプローチの意義と方法―ニーズ論的アプローチの今日的課題をふまえて―	加藤 悦雄（家政学部）
社会福祉士養成課程におけるボードゲームを用いたアクティブラーニング	桃井 克将（徳島文理大学）
中国語フィラー“这个”の使用法の分類に関する考察	陳 海涛（九州大学）
『ごもくめし』と留学生	伊藤 みちる（国際センター）
障害児保育における重要事項	桃井 克将（徳島文理大学）
テキスト「保育原理」における戦前の幼児教育に関する記載内容の分析（1） ―章構成と法令について―	杉山 実加（白梅学園大学）
周波数の異なる生体電気インピーダンス法で計測された体組成の推定 ―インボディと左右部位別インナースキャンとの比較―	小林 実夏（家政学部）
細胞質局在化RNAの局在化機構の解析	竹内 知子（短期大学部）
インターネットリスクを減少させる情報リテラシー教育―SNS利用におけるリスク―	市川 博（家政学部）ほか
ドイツ居住のバイリンガル小学生の日本語作文力 ―日本語補習授業校通学児の2年間の縦断的調査に基づいて―	柴山 真琴（家政学部）ほか

▶ 資　料

論　題	著　者
外集団尊敬に対する愛着不安傾向の効果	熊谷 智博（文学部）
特別支援教育と普通教育の狭間で―キャリア教育と療育―	川合 宏之（流通科学大学）
化学繊維がアレルギー性皮膚炎患者の皮膚に与える影響	水谷 千代美（家政学部）ほか
中国におけるジオパーク研究の動向に関する一考察	肖 錕（北海道大学）
中国社会および中国社会学の現状―復旦大学社会発展与公共政策学院訪問報告―	松村 茂樹（文学部）ほか
系統的なアカデミック・イングリッシュ力育成のための指導に関する研究	服部 孝彦（英語教育研究所）
『〈新板／絵入〉保元物語・平治物語』書誌解題	小井土 守敏（文学部）

Newsletter
Institute of Human Culture Studies Otsuma Women's University
大妻女子大学人間生活文化研究所ニューズレター
平成30年2月22日発行

お知らせ

■ 【4回連続採択！！】大妻女子大学図書館と人間生活文化研究所が協働で行う、私立大学図書館協会「寄贈資料搬送事業」

人間生活文化研究所では、ミャンマー連邦共和国に対する資料整備支援事業を行っています。その一環として、平成28年度より、大妻女子大学図書館と協働し私立大学図書館協会「寄贈資料搬送事業」に申請、ミャンマー連邦共和国の国立図書館や国境地域開発民族省民族開発大学図書館に英文学術図書を寄贈してきました。平成29年度も引き続き、同事業に申請し、第1回、第2回ともに採択。これで**4回連続の採択**となりました！！今年度ミャンマーに送り届けた図書は、約1,150冊。うち**約500冊は、吉原直樹元社会情報学部教授から寄贈**いただいた、東南アジア社会学関連の図書でした。

寄贈先のミャンマー民族開発大学図書館館長と大澤（大妻女子大学図書館長、人間生活文化研究所長）

■ 人間生活文化研究所下田講師、内閣府「国際青年育成交流事業『日本青年海外派遣』派遣団」団長に！

下田敦子専任講師が、平成29年9月7日から26日まで、内閣府「国際青年育成交流事業『日本青年海外派遣』ミャンマー連邦共和国派遣団」団長として同国に派遣され、公的機関、大学等への表敬訪問、現地青年との文化交流を行いました。帰国後に行われた国際青年交流会議（東京）では、皇太子殿下に謁見し、派遣先での活動について申し述べました。

人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー　2018

	科研費申請講座「科研塾」	戦略的個人研究費	共同研究プロジェクト	研究員研究助成	大学院生研究助成（A）（B）
2月			2.1 平成30年度応募受付開始（2.22迄）		
			2.16 予算執行伝票等の提出締切（17時迄）（H29）		2.20 平成30年度公募情報公開（応募受付は４月から）
3月	個別相談は随時受付	上旬 平成30年度公募情報公開（応募受付は４月）			3.9 「収支等実施報告書」提出期限（H29）
		3.16 「収支等実施報告書」提出期限（H29）			3.20 「研究実施報告書」提出期限（H29）
			3.23 「研究実施報告書」提出期限（H29）		
				末頃 平成30年度受入研究員決定（出願期間：平成29年12月１日～平成30年１月23日）	
4月	4.2 平成30年度第１回「科研塾」：新任教員の方向け	初旬 平成30年度応募受付開始（下旬頃迄）	上旬 平成30年度採択課題決定		初旬 平成30年度応募に関するガイダンス：新入生対象
			研究活動開始		初旬 平成30年度応募受付開始（５月上旬頃迄）
5月					
6月	上旬（予定） 第２回「科研塾」：平成31年度科研費申請に向けて	6.14 研究成果報告（「資料」）投稿期限（H29）			
		6.28 研究成果報告（「報告」）投稿期限（H29）			
7月	下旬（予定） 第３回「科研塾」：平成31年度科研費獲得に向けて	初め頃 平成30年度採択課題決定			初め頃 平成30年度採択課題決定

※このカレンダーについてのお問い合わせ先は、**Tel: 03-5275-6047**（千代田キャンパス内線**5650**）です。

大妻女子大学人間生活文化研究所
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地
大妻女子大学千代田キャンパス図書館棟6階
Tel: 03-5275-6047（千代田キャンパス内線5650）　Fax: 03-3222-1928
E-mail: info@o-ihcs.com

▶ ニューズレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/

※ このニューズレターは、全国の大学・大学院、企業研究所、研究助成団体、官公庁などの関係機関に、およそ1,900部発送し、配付しています。